

声の技芸を介した音楽的イメージの形成：  
高等学校における実践に基づいて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 薫子, 泉寄, 和恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009049">https://doi.org/10.14945/00009049</a>

## 声の技芸を介した音楽的イメージの形成 —— 高等学校における実践に基づいて ——

Formative Process of Musical Imagery through Vocal Artistries:  
Based on Practices of a High School

山下薫子\*・泉嵯和恵\*\*

Kaoruko YAMASHITA, Kazue IZUMIZAKI

(平成17年12月28日受理)

The aim of this study is to clarify the formative process of musical imagery on vocal artistries through a music class in a high school. In this paper, four genres of vocal music are treated as teaching materials; khoomii, shomyo, yodel, and opera. In order to evaluate the imagery of students, we prepare questionnaires based on rating scale method, which should be helpful for any other musical materials.

### はじめに

本研究は、高等学校における芸術科音楽の中で、諸民族の音楽、中でも「声の技芸」に焦点を当てた授業により、音楽的イメージがどのように形成されるのかを明らかにしようとするものである。

ここでいう「声の技芸」とは、様々な様式の「歌」とそこに含まれる技術的側面を意味するが、あえてこの名称を用いるのは、歌という概念が、諸民族とその文化において、多様に規定されうるものだからである。言い換えれば、歌に内包される要素や、それを取り囲む文脈が、文化的な背景やジャンルによって大きく異なるということである。そこで歌という用語に由来する誤解を避けるために、声の技芸という用語を用いることとした。

さて、学校教育の音楽科授業における諸民族の音楽の位置づけについて、これまでの研究では、主として「教材化の意義」と「指導方法」という2つの観点から論じられてきた。前者、すなわち教材化の意義は、大きく次の3つに分けられる(柘植, 1991; 加藤1993ほか)、①音楽美の尺度が文化によって異なるということを知ること、②人類にとって、音楽文化と音楽行動が普遍的なものであるということを知ること、③自己の音楽活動を振り返り、これを豊かにすること。また、指導方法に関して、次のような2つの方向性の存在が指摘されている(滝沢, 1994/2000)、①音楽の理解を通じ、その背景にある文化と社会の理解へと導く教授法、②音楽要

\* 静岡大学教育学部 \*\* 石川県立加賀高等学校

素に焦点をあてた教授法。これらは、指導者が題材を設定したり教材を選択したりする際に重要な根拠を提示するであろう。だがその一方で、その授業を受けた児童・生徒たちが、どのようにそれを受けとめ、どのように成長するのか、その具体的な姿を浮き彫りにするような研究は少ない<sup>1</sup>。

そこで、声の技芸すなわち声というもっとも身近な楽器を用いた諸民族の音楽について、学習者たちがどのようなイメージを形成するのかを明らかにしようと考えた。そのための手続きは以下の通りである。まず「声と歌を取り巻く文化的・社会的背景」と「声の技芸を介した音楽的イメージ」という2つの観点から、その教材性を検討する。次に、声の技芸からホーミーと声明、ヨーデル、オペラを教材とした、高等学校における「音楽Ⅰ」の授業の実際について報告する。その後、高校生の中に、声の技芸に対するイメージがどのように形成されたのかを明らかにするため、評定尺度法を用いた質問紙調査を行い、その結果を分析する。これらのデータに基づき、声の技芸を教材化することの意味とその評価方法について考察し、成果と課題を導き出す。

## 1. 声の技芸の教材性

### (1) 声と歌——その文化的・社会的背景

「うた」を辞典でひくと、歌、唄、謡、哥の4つの文字が列挙されている<sup>2</sup>。これらはほぼ同義語であるが、時代や種目などによって、使用される漢字が異なる。このことは、私たち日本人が種々の外来文化を受け入れては、自国文化と同化させてきたことの表れと考えてよいだろう。

さらに諸民族の音楽へと視点を移せば、その文化的背景と社会的背景は、さらに複雑化する。そして、言葉と歌、あるいは声と歌との境界線をどこで引けばよいかという基本的な問題ですら、一定の統一見解を得るのは困難である。そこで本項では、宗教の中の歌、自然と交信する歌、生活と密接にかかわる歌、劇音楽としての歌の4点に絞って、その意味を考えてみたい。

#### ①宗教の中の声と歌——異界や超越者との交信

宗教の典礼において、声の果たす役割は大きく、朗誦と歌とが密接にかかわりあっている。例えば、現行のキリスト教典礼様式では、参列者によって賛美歌が斉唱または合唱されるのが一般的であるが、一部の宗派では聖職者のみによって唱えられる<sup>3</sup>。イスラム教のコーラン朗誦や仏教の声明などのように、僧侶によって唱えられるものは、全体的に抑揚が少なく、声の力強さに特徴がある。世界でもっとも低い声と形容されるチベットの聲明は、異界や超越者と交信するかのよう、突き上げるような力強い響きをもっている。

#### ②自然界と交信する声と歌

自然民族<sup>4</sup>において、環境が声の質に与える影響は計り知れない。一例を挙げてみよう。ホーミーは10世紀頃から伝わるモンゴルの伝統的な発声法であるが、起源は岩山を吹き抜ける風の音を真似ることだったと言われており、数キロ離れた地点でも聞こえることがあるという。また、アイヌの音楽では、歌に対する固定観念を打ち破るような発声法のものがあり、鳥の鳴きまねの歌なども多く聞かれる。

### ③生活と密接にかかわる声と歌

現在ではあまり聞かれなくなったが、わが国の生活において、かつては物売りの声が音楽的な響きをかもし出していた。また、相撲甚句のように、発声と抑揚の両面から高度に発達した言語が存在する。さらにアルプス地方のヨーデル音楽は、山中で連絡をとるための叫び声から発達したというのが定説になっている。ほかにも、戦いや労働に結びつく歌が、世界のいたるところで多くみられる。

### ④劇音楽としての声と歌

洋の東西を問わず、劇音楽の中で言葉と歌が果たす役割が大きいことは、周知のとおりである。歌舞伎における長唄、京劇（ジンジュ）における唱（うた）、あるいはオペラにおけるレチタティーヴォとアリアなどは、いずれも高度な技術をもつ声の表現形態であると言える。しかし、かつてはモーツァルトが苦慮したように、劇音楽において言葉と歌は絶えずせめぎあっている。あるときは言葉が声を規定し、またあるときには声が音楽を規定するのである。

このように、声と歌、あるいは言葉と歌は、実に様々な関係性を有している。それでは、こうした複雑な様相を呈する声の技芸と出会うとき、私たちの中にはどのような音楽的イメージが形成されるのであろうか。

## (2) 声の技芸を介した音楽的イメージ

音楽的イメージとは、「音楽刺激やその残効なしに生じる、音楽体験の持続」を意味する<sup>6</sup>。つまり音楽的イメージとは、意識的、能動的に再構成されたり、創造されたりするものであり、音楽の諸活動において重要な役割を果たしている。筆者（山下）はこれまで、演奏行為とその学習過程において形成される音楽的イメージの評価システムを考案してきた（Yamashita,2005）。この成果に基づき、本項では声の技芸を介して形成されるイメージに、どのような要素が含まれるのかを考えてみたい。

まず、もっとも大きな要因となるのは、響きの特性に対するイメージである。これは、単なる聴覚的なイメージのみならず、響きとの共振によって得られた内的な感覚によるものである。この響きの特性に対するイメージの形成は、学習経験によるものというよりも、むしろ聴取の質によるところが大きい。

次に影響を与えるのが、運動性である。声が歌として認識されるとき、そこには一定の揺れとまとまりが観察される。その揺れやまとまりの単位を形成する動きによって、声に対するイメージが左右される。この運動性も、響きの特性と同様、共振という内的な感覚に基づいてイメージ化される。そしてこれが、イメージに共通感覚的性質、あるいは運動感覚的性質を付与しているのである。

3つ目の視点として、空間性を挙げておきたい。前項でも確認したとおり、声とその技芸は、それが誕生するに至った文化的背景をもっている。屋内、屋外の別はもとより、同じ屋外でも空間的なスケールの大小によって、声の圧力や言葉の引き伸ばされ方が異なる。これらの違いをイメージに変えられるかどうかは、学習によるところが大きいと考える。

その他、音楽が機能的に用いられる場が、イメージの形成に影響を与えることもある。例えば、オペラ《椿姫》の〈乾杯の歌〉は、結婚披露宴の席で聞かれることの多い曲である。これを鑑賞した場合、ベルカントの声やその音楽のもつ華やかさがイメージ化されるのはもちろん

のこと、結婚披露宴のもつ豪華さや明るさなども、イメージの一要因となりうるのである。

## 2. 授業への展開

### (1) 授業の目的

本項では、声の技芸を教材として行った筆者（泉崙）の授業実践について報告する。研究対象校の生徒は、半数以上が卒業後に就職を希望しており、近年ますます進学希望者が減少している。したがって、多くの生徒にとって、「音楽Ⅰ」が、生涯最後の音楽授業となるということが予想される。音楽授業に対しては、J-POPの歌唱を希望する声が圧倒的に多い。しかし、高等学校芸術科の目標にあるとおり、「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う」（高等学校学習指導要領、平成11年版）ことが、彼らにとって重要な課題であろう。生徒の求める音楽を扱うだけでなく、本校の実態を踏まえながら、多様な音楽体験を持たせたいと考える。

そこで、鑑賞の授業において、学習がどのように成立し、どのような音楽的イメージが形成されるのかを明らかにするため、実践研究を行った。ここで取り上げるのは、世界の「声を用いた音楽」<sup>5</sup>である。特に声の特徴を把握しやすいと思われる4つの音楽、すなわちホーミー、声明、ヨーデル、そしてオペラを教材とした。授業に加えて、授業開始時、学習後、そして半年後に質問紙調査を実施し、生徒の音楽聴取時のイメージがどのように変化するかを調査した。

### (2) 授業の内容

授業前に「オペラを知っているか」という予備調査を実施したところ、90%に近い生徒が「知っている」と答えた。これは、授業の直前に全校鑑賞したオペラシアター「こんにやく座」の《まげもん》の影響と思われる。知っていると答えた生徒のオペラに対するイメージは「演劇のよう」「声が高くてゆったりした」「声がきれい」「お腹から声を出す」「響く声をだす」というものであった。ただし、今回の授業で扱うオペラは、イタリア・オペラである。したがって、ここで聴かれる声は、「ベルカント唱法」であり、前回の「こんにやく座」とはまったく異なっている。また、ホーミーとヨーデルに関しては、10%程度の生徒が知っているにすぎなかった。

#### ① 題材名 声を用いた音楽を味わおう

#### ② 題材の目標

- ・文化・風土の違いにより、発音法、発声法などに特徴があることを理解する。
- ・多様な民族音楽の特徴を理解し、その価値やよさを認める。
- ・友達の発表をよく聞き、友達の考えを認め合うことで、鑑賞曲の理解を深める。

#### ③ 授業期間及び授業時間

2005年6月24日（金）から7月15日（金）までの間、1週間に2回、合計6時間、1回あたり50分間の授業を実施した。

#### ④ 教材および教具・資料等

##### ○教材と教材選択の視点

- ・ホーミー 日本の追分や民謡に近い特徴をもつモンゴルの民族音楽。しかし、1人で2つ以上の音を同時に発声するという技術と、その独特な声音が、生徒たちの歌についての既

成概念を揺さぶるのに役立つ。

- ・声明 寺院の読経として、一度は耳にした経験があると予想される。宗教と音楽との密接な係わり合いについて認識を深めるきっかけが得られる。
  - ・ヨーデル 表声と裏声を行き来する発声法の特徴から、「歌う声」と「話す声」との境界や、人々を取り巻く自然と歌声との関係に興味をもたせることができる。
  - ・オペラ 舞台芸術における歌唱様式の1つとして取り上げる。「ベルカント唱法」と呼ばれるその発声法は特徴をつかみやすく、高校生の興味をひきつけるだろう。
- これらは、いずれも声を用いた音楽であることから、歌唱表現への工夫のみならず、自分の声の振り返りにも大きく影響を及ぼすことが期待される。

#### ○教具・資料等

- ・「Tutti」音楽I教授資料指導用CD（教育出版）
- ・松任谷由実「驚異の歌声ホームーへの旅」（録画VTR）
- ・高野山の声明「常楽会一法会具現絵巻一」（プラスクラフト）
- ・「高等学校音楽鑑賞DVD～民族編～」（教育芸術社）
- ・歌劇《椿姫》より〈乾杯の歌〉DVD（ビクター）
- ・アジア全図、ヨーロッパ全図

#### ⑤ 対象生徒

I 県立K高等学校1年2組 音楽受講生徒 男子2名、女子14名、計16名。

#### ⑥ 指導方法

第1回授業開始時に、声を用いた音楽とは知らせずに、ホームー、声明、ヨーデル、オペラの一部を約10秒間ずつ再生する。その後、4種類の声を用いた音楽であることに気づかせる。音楽の種類を確認し、それぞれ約30秒間、もう一度再生する。どのような響きがあったか、どのようなイメージを持ったか、どこの国の音楽かについて、学習カードに記述させる。

記述が済んだところで、それぞれのイメージを発表しあい、共有する。世界地図で、国の場所を確認した後、演奏映像を鑑賞する。次の3つの観点から、感想を学習カードに記入する、A. 聴いた時と映像を見た時のイメージの違い、B. 発音・発声法など、C. 衣装・雰囲気について。

最後に、4種類のうち、一番興味をもった音楽の種類とその理由を記入する。さらに学習を発展させるため、グループに分かれ、それぞれの国の音楽の特徴、文化などを図書室で調べる。最後に4種類の音楽を改めて聴き、理解を深める。

### 3. 音楽的イメージの形成

授業を通して、生徒たちの中にどのようなイメージが形成されたのかを明らかにするため、①学習カードの自由記述（6月）、②授業時とその前後の観察記録（6月）、③もっとも興味をもった音楽の比較（6月と12月）および④評定尺度法を用いた質問紙調査（12月）を行い、その分析結果に考察を加える。

#### (1) 学習カードの自由記述

生徒たちは、声を用いた音楽に対してどのようなイメージを抱いたのであろうか。映像なしで聴取したとき（左）と、映像を伴って聴取したとき（右）の記述内容を、ジャンルごとにまとめた（表1）。映像なしで聴取したときには、声音から受ける印象に加えて、これまでにその音楽を聞いたことのある「場」や、そこから連想されるイメージが、数多く挙がっている。

表1：声を用いた音楽に対する生徒のイメージとその変化

	2回目聴取時のイメージ	映像を観賞後
ホーミー	暗い、葬式のような、悲しい、怖い、夏に聴くと暑苦しい。	先に聴いた時と同じで暗い、落ち着いている感じ、楽器を使っていると思ったが声のみだった、お葬式だと思っていたが違った、祝いの歌と思ったら家族のことを思う歌だった、何かの儀式のような。
声明	ホーミーより明るい感じ、お経のよう、寺で流れていそうな、能楽のような、うめいているような、蝉が鳴いていそうな、コップの中に声を閉じこめた感じ。	先に聴いた時と違って葬式のようなだった、1人で歌っていると思ったが大勢で歌っていた、能楽のようだと思ったがお経だった。
ヨーデル	海岸で踊るような、明るくて楽しそう、ゆかいな、パーティのような、草原のような、牧場のよう、夏のような、ロシア系の音楽のような、アルプスにいるような、アニメ「アルプスの少女ハイジ」の音楽のような。	先に聴いた時と同じで明るく楽しい感じ、海ではなく山で歌っていた、マッターホルン、静かなところで歌っていそうな、草原ではなく白い山だった、自然な。
オペラ	貴族が歌っていそうな、イギリス系の音楽のような、激しい、踊っている感じ、イタリア料理店で流れていそうな。	結婚式のような、お酒の歌詞だった、激しい曲でなかった、ごっつい

映像を伴って聴取したときにも、声音から受ける基本的な印象は変化していない。しかし、オペラでは《乾杯の歌》での歌手の華やかな衣装、容姿の美しさに興味を持つこととなった。こうした視覚的なイメージが、直接・間接的に声のイメージにも影響を及ぼしているであろうことが推察される。

## (2) 授業時とその前後の観察記録

今回の一連の授業では、通常とは異なる生徒の反応が多数観察された。これらのうち、特に身体的な反応に特徴のあるものを、表2に示す。

表2：授業の中およびその前後で観察された生徒の反応

日時	生徒の反応
2005.6.24 (金)	読譜やリコーダー演奏が苦手なSさんが、授業後、オペラ《椿姫》の《乾杯の歌》を歌いながら、音楽室を出て行った。
2005.7.8 (金)	落ち着いて座っていることができないH君が、オペラ《椿姫》を鑑賞中、歌手のことを「顎をすごく引いている」と分析して、声を真似ていた。
2005.7.12 (火)	落ち着いて座っていることができないTさんが、オペラ《椿姫》を観賞後、「あのような声を出すためには、鼻の穴を大きくして、鼻からも歌えばよい」と分析して、声を真似ていた。

普段の授業では、音楽に対して苦手意識をもっていたり、じっと音楽を聴くことが困難であったりする生徒たちが、オペラに強い関心を示していることがわかる。特に、姿勢や顔の表情を真似ながら声を出していることから、オペラの歌手との共振が起これり、そのイメージが力強く作用しているものと考えられる。

(3) もっとも興味をもった音楽の比較

4種類の音楽の中から、もっとも興味をもった音楽1つを挙げさせ、その理由を記述させた。さらに、同様の調査を12月にも実施し、結果を比較した(表3-1と3-2)。

表3-1 6月の授業直後において「もっとも興味をもった音楽」とその理由

	生徒数	理 由
ホーミー	0	
声 明	0	
ヨーデル	2	おばさんなのに、かわいい服をきていて、ハイジみたいでよかったから。声もかわいく綺麗だった。男の人の声がよかったから。
オペラ	12	一番印象に残ったから。劇のようで、目・耳で楽しめそうだから。明るい感じだから。結婚式にちょうどよいから。声がきれいだから。かっこいい歌い方だから。

表3-2 12月の質問紙調査時における「興味をもった音楽」とその理由

	生徒数	理 由
ホーミー	2	不思議な感じがしたから。真似がうまいから
声 明	0	
ヨーデル	9	楽しそうだから。踊っていそうだから。明るい感じがいいから
オペラ	2	もっともよく聴いたことがあり親しみやすかったから。よい曲だから

6月の授業時には、大半の生徒がオペラに興味を持っていたのに対し、12月の調査時には、興味の的がヨーデルの方に移っている。この変化には、6月の授業後に行われた調べ学習の結果が影響しているものと思われる。しかし、オペラもヨーデルも、西洋の機能和声に基づいた音楽であるという点は興味深い。普段、聞き慣れた様式、あるいはそれに近いジャンルの声の方に関心が向きやすく、肯定的なイメージをもちやすいということであろう。

(4) 評定尺度法を用いた質問紙調査

授業から約半年が経過した12月16日に声を用いた音楽に対するイメージがどのように変化しているかを把握するため、音楽Iの受講生徒を対象として、質問紙調査を実施した。この際、音楽は映像なしで聴取させている。

また、授業の効果を測定するため、受講生と非受講生を比較する必要があると考え、美術受講生徒男子8名、女子6名、計14名にも、同様の調査を実施した。

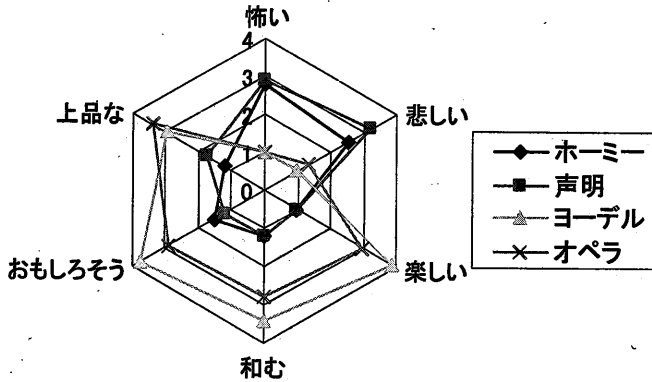
まず、6月の授業時に生徒が記述した感想の中から、「怖い」「悲しい」「楽しい」など、声音のイメージに関する代表的なキーワードを抜き出し、4段階の評定尺度を作成して(資料参照)、音楽の様式ごとに6項目について評価させた(グラフ1)。さらに、授業での学習内容を反映させる形で、「楽器の音のような」と「人の声のような」など、対になる言葉を10項目にわたって設定し、同じく4段階の評定尺度を作成して(資料参照)、音楽の様式ごとに評価させた。そして、項目ごとに○のつけられた数字の平均値を計算し、これに基づいてグラフを作成した(グラフ2-1~2-4)。



美術受講生徒には、これらの質問紙調査に加えて、それぞれの音楽に対する色彩的イメージを記入させた（表4）。

① 評定尺度法による各音楽に対するイメージの測定

グラフ1：音楽I受講生による各音楽に対する印象



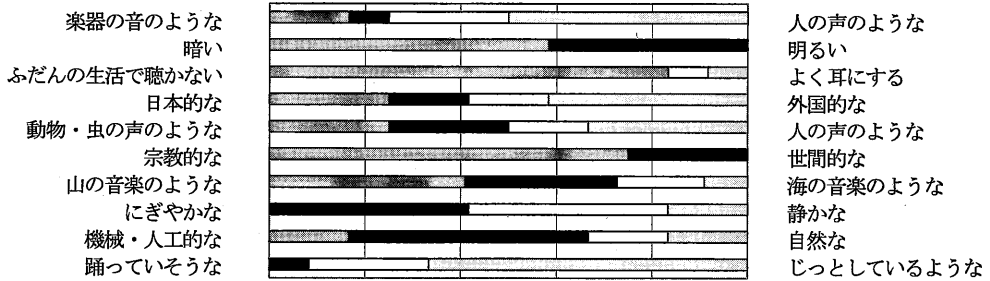
まず、4種類の音楽に対する印象の基本的な項目について、音楽受講生徒と美術受講生徒の回答を比較してみよう。これらの音楽を聴いたのは、音楽受講生徒が2回目であるのに対し、美術受講生徒は初めてである。しかし、グラフの形は、ほぼ同じものとなっている。ヨーデルの「和む」と声明の「楽しい」に関して、わずかに0.4ポイントの差が見られた。また声明の「和む」について0.6ポイントの差が見られたが、これは美術に男子生徒が多いため、自分の声と近いものに肯定的なイメージをもったためであろう。この結果から、聴取体験の有無と声音に対するイメージとの間に相関は見られないと言ってよいだろう。

② 学習内容を反映させた評定尺度法による各音楽に対するイメージの測定

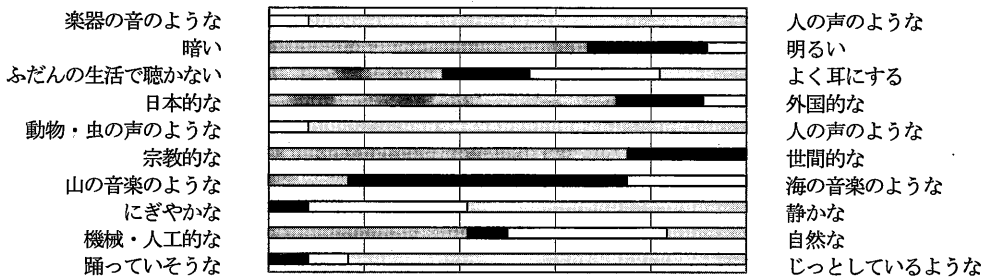
次に、授業における学習内容を反映させた評定尺度の回答結果をみてみよう。

各グラフの横棒は、左から順に、各項目の左側に掲げられた10の語それぞれについて「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答した人数の、全体に対する比を示している（つまり、右側に掲げられた語から見れば、「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の人数比を示していることになる）。

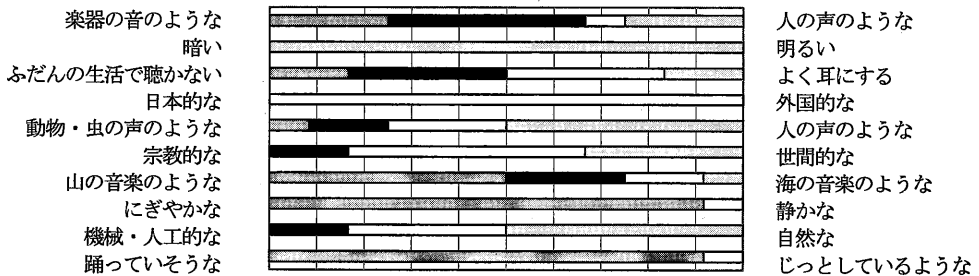
グラフ 2-1 音楽 I 受講生徒による「ホームー」に対するイメージ



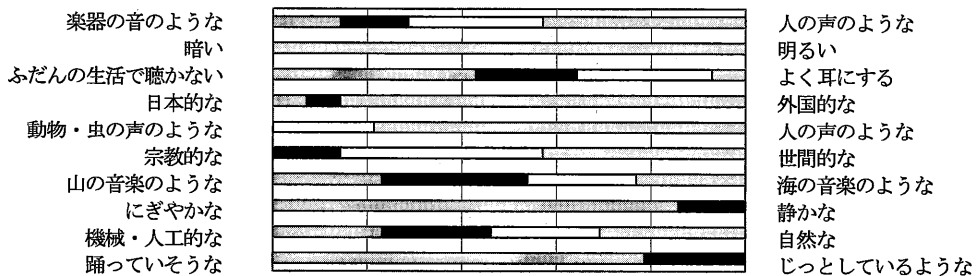
グラフ 2-2 音楽 I 受講生徒による「声明」に対する印象



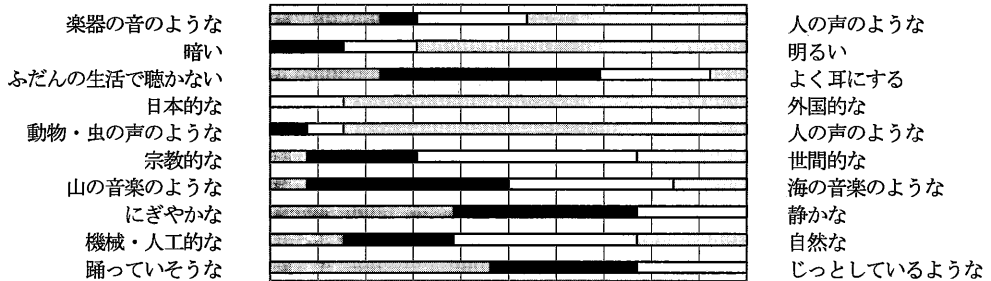
グラフ 2-3a 音楽 I 受講生徒による「ヨーデル」に対する印象



グラフ 2-3b 美術 I 受講生徒による「ヨーデル」に対する印象



グラフ2-4 音楽I受講生徒による「オペラ」に対する印象



音楽I受講生徒と美術I受講生徒の回答を比較すると、ホーミーと声明については、かなり類似した結果が得られている。ホーミーに対しては、どちらも「暗い」「じっとしているよう」というイメージをもっている。声明では、「人の声」「日本的」「じっとしているよう」という回答が高い。「宗教的な」の項目について、音楽受講生の方が若干高い数値を示しているのは、学習の成果と考えられるだろう。これらとは反対に、オペラについては、「明るい」「にぎやかな」「踊っているような」に高い数値が示され、全般的に動的なイメージをもったことが読み取れる。

音楽受講生と美術受講生の回答の間にもっとも大きな違いが見られたのは、ヨーデルであった。音楽受講生と美術受講生の両方が「明るい」と回答しているところが特徴的であるが、音楽受講生が「外国的な」「山の音楽のような」「自然な」イメージを強くもっているのは、映像を伴う聴取を通して得られた「スイスの音楽」に対する様式的理解の一端を示すものであると言える。

続いて、美術受講生に対してのみ、色彩的なイメージを回答させた。美術受講生は、映像を伴った聴取を行ったことがないため、それぞれの声音に対するイメージが直接的に反映されると考えたからである。

表4：それぞれの音楽に対する色彩的なイメージ（数字はその回答数）

	色
ホーミー	黒6, 茶4, こげ茶1, 緑1, 深緑1, 金1, 銀1, 紺1,
声 明	黒5, 深い青1, 冬の海の色1, 紫1, 藍1, 青2, 灰色1, ねずみ色1, 黄1, 金1
ヨーデル	オレンジ3, 黄3, 赤4, ピンク1, うすい青2, 青1, 緑1, 白1, うすくて明るい色2
オペラ	赤4, 赤系1, 透明(ダイヤモンドみたいな)1, シルバー1, 白1, 金2, オレンジ1, 黄1, 緑2, 青3

ホーミーと声明に、黒や寒色系の回答が多く見られた。これは、声音から受ける印象に加えて、その抑揚の少なさも影響していると考えられる。一方、ヨーデルとオペラに関しては、暖色系の色のイメージが強かった。さらに、具体的な色ではなく「うすくて明るい色」「ダイヤモンドみたいな」などの形容もみられた。頭声を用いた発声、あるいはベルカントのもつ声音の透明感が、これらの形容を引き出したのであろう。

色彩的イメージや触覚的イメージを問うことも、音楽的イメージに含まれる身体的な感覚を解明する上で有効であると考えられる。

#### (4) 考察

今回の調査を通して、声の技芸を介して形成される音楽的イメージが、声音の印象のみならず、その揺れや空間性、伴奏の有無など、他の要因にも影響されることが分かった。特に、ヨーデルやオペラなど、耳慣れた西洋の機能と声に基づく歌声の方が、東洋の音楽や朗誦における声よりも「明るい」と認識されているのは興味深い。これについては今後、映像の有無との関連性などともあわせて、詳細に検討してみたい。

評価の方法について言えば、生徒に語彙や体験が少ない場合、自由記述に任せると、表層的な回答しか出てこないことが多いが、イメージを表す言葉を選択肢として与えることで、より生き生きとした回答が得られることが分かった。

また、音楽を集中して聴く能力が低いと考えていた生徒が、意外にも音楽と共振したり、感情移入したりしながら聴いているということを発見できたのは、大きな収穫であった。今後は、この発見を学習の継続化へとつなぐための方法を追究してゆきたい。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、授業実践および質問紙調査方法の開発を通して、生徒の中に形成された音楽的イメージを多角的に評価するための方法を編み出すことができたと考える。この評価方法については、声の技芸に限らず、他の表現媒体による音楽についても応用が可能であろう。今後は、さらに実践および調査を積み重ねて、この評価方法の一般化を図ってゆきたい。

その他、今後の課題としては、以下の2点が挙げられる。

- ①声の技芸の形成原理や様式的理解へと導くような指導と評価のあり方を検討すること。
- ②鑑賞と表現の連関、音楽と他教科あるいは総合的な学習との連関をはかりながら、自らの歌声、ひいては話し声の振り返りへと導くような指導と評価のあり方を検討すること。

諸民族の音楽は、とかく異文化性の強調に終始しがちな教材であるが、様々な音楽と接し、絶えず自らの価値観を揺さぶりながら、その行動に磨きをかけ続けること、そこにこそ、学校教育の授業において諸民族の音楽を学ぶことの意義があるように思われてならない。

※ 本研究は平成17年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 「音楽的イメージの育成プログラムと評価システムの開発」(研究代表者: 山下薫子, 課題番号15730390) の助成を受けて行われたものである。

#### 注

- 1 この問題について、降矢 (2000) が評定尺度法を用いた興味深い試みを行っているが、ここでの主たる議論は指導法の優劣を問うことにあるため、本研究とは基本的な方向性を異にしている。
- 2 「うた」『新訂 標準音楽辞典』音楽之友社, 1991, p.213。
- 3 「宗教音楽」同上, p.809。
- 4 「自然民族の音楽」同上, p.757。

- 5 授業実践においては「声を用いた音楽」という名称を用いているが、これは高校生に理解しやすいように配慮したものであり、「声の技芸」と同義である。
- 6 Intons-Peterson, M.J. (1992) の聴覚イメージの定義に倣って、概念規定したもの。

#### 参考文献

- 『新訂 標準音楽辞典』(1991) 音楽之友社。
- 加藤富美子 (1993) 「音楽における異文化理解の構図(1)」『音楽教育学』第23-2号, 日本音楽教育学会, pp.24-26。
- 小沼純一他 (2003) 『21世紀の音楽入門3 声』教育芸術社。
- 滝沢達子 (1994) 「音楽教育と文化をめぐる視点」『音楽教育学』第24-1号, 日本音楽教育学会, pp.3-10。
- 滝沢達子 (2000) 「コア・カリキュラムとしてのワールド・ミュージック」『音楽教育学研究 3』日本音楽教育学会, pp.62-77。
- 柘植元一 (1991) 『世界音楽への招待』音楽之友社。
- 降矢美彌子 (2000) 「異文化理解を志向する音楽教育における基本テーゼの提唱」『音楽教育学研究 3』日本音楽教育学会, pp.78-92。
- 山形頼洋 (2004) 『声と運動と他者』萌書房。
- Intons-Peterson, M. J. (1992) “Components of Auditory Imagery.” *Auditory Imagery*. Edited by D. Reisberg, Lawrence Erlbaum Associates, pp.45-71.
- Yamashita Kaoruko (2005) “A Theoretical Framework for Evaluating Musical Imagery. *Bulletin of the Faculty of Education Shizuoka University [Educational Research Series.]* No.36, 2005. 3, pp. 255-264.

資料 12月に実施した質問紙調査の一部

♪ 音楽 ♪ アンケート

ホーミー

H 番 名 前

◇これから、前期に学習した4種類の音楽を聴きます。それぞれの音楽について、今のあなたが感じたイメージに近いものを、○でかこってください。

とても怖い	少し怖い	ほとんど怖くない	怖くない
とても悲しい	少し悲しい	ほとんど悲しくない	悲しくない
とても楽しそうな	少し楽しそう	ほとんど楽しくなさそうな	楽しくなさそうな
なごむような	少しなごむような	ほとんどなごまないような	なごまない
おもしろそうな	少しおもしろそうな	ほとんどおもしろくなさそうな	おもしろくなさそうな
とても上品な	少し上品な	ほとんど上品でない	上品でない

ここから下は、  
例：あなたの感じたイメージが、「楽器の音のようだ」の場合は4、「少し楽器の音のようだ」の場合は3、「少し人の声のようだ」の場合は2、「人の声のようだ」は1として、あなたのイメージに近い状態の数字をかこってください。

楽器の音のような	4	3	2	1	人の声のような
暗い	4	3	2	1	明るい
ふだんの生活で聴かない	4	3	2	1	よく耳にする
日本的な	4	3	2	1	外国的な
動物・虫の声のような	4	3	2	1	人の声のような
宗教的な	4	3	2	1	世間的な
山の音楽のような	4	3	2	1	海の音楽のような
にぎやかな	4	3	2	1	静かな
機械・人工的な	4	3	2	1	自然な
踊っというような	4	3	2	1	じっとしているような